

## [編集後記]

◇ 第49回の千葉医学会総会が、去る5月13日に開かれました。米沢総務幹事により、新しい形に改められてから3年目で、今年が役員の交替期に当り、種々の重要議事が決定されました。その詳細は千葉医学会年報の第3号に譲ることとして、ここでは編集に関したことだけをお知らせしておきます。

① 幹事交替：編集幹事が本年6月1日から3年間の任期で桑田教授に決定しました。従って本号以後の本誌の編集兼発行人は桑田先生になります。ただし48巻の編集業務の責任は従来通り萩原がとることになりました。

② 雑誌の発行について：隔月刊であることに変わりはありませんが、48巻5号を49巻1号とすることが、総会で承認されました。従って48巻は4号までとなり、今後は毎年1・3・5・7・9・11月の末に1～6号が発刊されることとなります。

◇ 本号の巻頭で、久しぶりに川喜田先生の独特なスタイルと含蓄のある文章に接することができます。編集部からの無理なお願いにもかかわらず、かなり以前に玉稿をお寄せいただいたのですが、今日ここに掲載されても時期的には決して古くない、大切なお指摘がなされています。医学における改革が十分にフレキシブルでなければならないこと、常に try and error の覚悟を持たなければならないことなど、先生がいまなお輝ける“現役”であることのあかしだと思いました。

◇ 総説は公募による依頼、講座は応募されたものでした。石黒、伊藤両先生による「選択的冠動脈造影法」は昭和34年以来一外科で行なわれてきたこの新たな診断法について、その深い経験から、方法の検討、造影所見、安全性などについて考察を加えられたものです。一方山口先生の「地中海貧血」は、その副題にもある通り、千葉県で発見された珍しい血液疾患のひとつで、10年ばかり前までは本邦に存在しないと信じられていた疾患が千葉を含めて日本の各地で発見された経過について、まさに講座にふさわしく書かれています。まだ珍しい血液疾患があるとのことで、いずれまた筆を執っていただくことにならうかと思えます。

◇ 原著は2篇で、昨年度の平均が1号5篇であったのに比べるとかなり減っています。山中氏の論文は腐研の新井教授が別府の土壌から分離した放線菌の代謝産物の中から得られた新抗生物質に関するもので、内容からい

って2篇分位はあったものを、かなり凝縮していただいたものです。また新井氏の論文は子宮頸癌の手術後、予後に重大な関連をもつ各種尿路合併症について、その検査法への新しい提言ならびに合併症の改善についての試みに関するもので、境界領域における研究として注目されます。

◇ 波多野さんが本学微生物学（当時細菌学）教室から金沢の教授になって行かれてからもうかなりの年月が経ちました。母校とは違った大学で研究して居られる先生方からの余話をいただきたいという編集委員会の意向で、まず第1号として波多野さんに研究余話をお願いしたのですが、これが凶に当り、大へん感激的な余話を載せることができました。Y博士のような人はたしかに今時珍しい人かも知れない。しかしその五十の手習いは心の豊かさとなって酬いられているものであろうと思えます。日々ゆとりを失って行くような現在の生活に対して、洵に耳を洗われるようなエピソードでした。われわれも五十の手習いを心掛けるべきではないでしょうか。

◇ あらあむ・しくなるは今回は中田先生の「頭の大きい子」について、小児脳外科とでもいうべき立場からの危険信号です。信号の意味をよくくみとることになって被害を最少限に喰いとめにできましよう。くるつふぁっせんは東条先生の「不明の発熱」、植村先生の「肝障害とツアゼパムの使用」で、これまた、あらあむ・しくなる的な重要な示唆を含んでいます。気軽に読んでいただいて、かも有益なこのような欄は、今後も本誌の特長のひとつとして続けて行きたいと思えます。どのようなことを取り上げて欲しいか。読者の方から随時ご意見をお寄せ下さるようお願いいたします。

◇ 最後にお詫びとお願い。

① 先日ある会員の方から、依頼原稿の著者の方で、大へん不快をもたれている方があるとお知らせいただきました。調べてみると編集幹事が依頼するときに言葉が足りなかったこと、事務的な連絡があまりに事務的であったことなどが原因であることがわかりました。不快を持たれた方には誠に申し訳なく、この紙面を借りて公開でお詫び申し上げます。

② 本誌に所定の原稿用紙ができました。できるだけこれを使っていただきたいと思えます。入手方法は事務局へお電話下されればわかるようになっていきます。お願いいたします。  
(萩原弥四郎)